



Gillette、ある刃のアトラス

2058年4月1日

私は人生最後のひと月に入っていた。もう先延ばしのきかない期限だ。

93歳。ずっと自分は釣り人だと思ってきた。

蓋を開けてみれば、クソほども分かっちゃいなかった。

誰かが私を写真に収めていた。木の舟、手には釣り竿、背後にはヴェスヴィオ山。

まるで私が、どこに針を投げればいいかを覚えた男であるかのように。知っている男であるかのように。

それから、その写真をもっとよく見た。

私の釣った魚は動いていない。息を求めてあえいでもいない。

読んでいる。GILLETTENARRATIVEを読んでいるのだ。英語で、スペイン語で、中国語で、アムハラ語で、ウルドゥー語で、アラビア語で。

私は魚を釣った。その魚が、私を研究している。

何年ものあいだ、進化とは、より多くの言語を話し、より多くの地図を、より多くの版を持つことだと信じていた。

22の版。うち5つは何巻にもわたる。17は巻数を数えてさえいない。それにしても、クソ、いったいどれだけ書いたんだ、私は。

それから分かった。進化とは、どれだけの水をくぐり抜けてきたかではない。針にぶら下がっているそのときに、まだ読むだけの明晰さがあるかどうかだ。

エイプリルフールは、他人に仕掛ける冗談ではない。自分は釣り人だと思っていたら魚だったと知る、そのときに人生が仕掛けてくる冗談だ。

そして運がよければ、その日に、読むことも覚える。

私はその日に覚えた。だが、もう終わりに来ていた。ゴールラインは記憶を残さない。残すのは、忘れがたい者になるという可能性だけだ。

フェルディナンド